

6.西谷地区の神社

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/9709

6. 西谷地区の神社

相馬 翔一

1. はじめに
2. 西谷地区の神社についての概説
3. 各集落の神社について
4. 考察

1. はじめに

浄土真宗への信仰が厚い北陸地域において、この西谷地区もその例に漏れることは無い。むしろ、地区内に蓮如上人の足跡がはっきりと残っていることや今なお各種真宗行事が行われていること、調査で訪れた各家々の仏壇の豪華さなどから、その信仰心はとりわけ顕著なものと言えるかもしれない。

そうした状況の中で、地域の人々にとっての神社やそれに付随する行事はどんな存在なのだろうか。現代において、仏教が盛んな地域での神社の役割は、この西谷地区ではどういったものなのか。

以下では、神社そのものについての説明や祭り等の行事について、そして過去と現在との比較などから、現在各集落の神社が人々とどのように関わりあい、神社が人々にとってどのような意味を持っているのかを考えていきたい。まず、西谷地区全体の概説、次に調査した4集落の詳細、そして考察へと進めていく。

2. 西谷地区の神社についての概説

西谷地区の神社を見てみると、まず、我谷ダム・九谷ダム建設以前の状況も含めて一集落に一つの神社があることがわかる。それぞれ集落と名称については、菅谷—八幡神社、下谷—白山神社、栢野—菅原神社、我谷—八幡神社、風谷—八幡神社、大内—白山神社、枯淵—八幡神社、片

谷—片谷神社、坂の下一日置神社、小杉—小杉神社、生水—生水神社、九谷—三柱神社、真砂—真砂神社である。このうち片谷・小杉・生水の各神社は、九谷ダム建設による大半の住民の山中町加賀美台への移住に伴い、同じく加賀美台へ移転した坂の下の日置神社に昭和 60（1985）年に合祀されている。

表 1 西谷地区の神社

	神社名称	祭神	仏（仏像など）
菅谷	八幡神社	応神天皇	
下谷	白山神社	菊理比咩神	
栢野	菅原神社	菅原道真	
我谷	八幡神社	応神天皇	木造観世音仏
風谷	八幡神社	応神天皇	木造阿彌陀仏
大内	白山神社	菊理比咩神	
枯淵	八幡神社	応神天皇	
片谷	片谷神社	菅原道真	
坂の下	日置神社	天押日命	木造十一面観音像
小杉	小杉神社	菅原道真	木造観音像
生水	生水神社	菅原道真	
九谷	三柱神社	宇氣持神 大宮売神 猿田比古神	
真砂	真砂神社	天照大神	木造大日如来像

（『山中町史 現代編』を参考に筆者が作成）

また、これら西谷地区すべての神社の神事を現在兼務担当しているのが、加賀市山中温泉白山神社禰宜のYさん（40歳代、男性）である。本来白山神社の宮司は口伝では14代目というYさんの父親ではあるが、実質的な神事はYさんが執り行っている。現在、ダム建設によって離村して人がなくなった集落のうち、真砂の真砂神社はこの白山神社境内に併祀されているのだが、下で述べていく4集落などを含めたそれ以外の集落においては、Yさんが祭り等の行事ごとに各集落の神社を訪れ、神事を取り仕切っている。祭りの際の神事の流しは、4集落ともほぼ共通している。

次の特徴としては、各集落の神社において春の祈年祭の春祭りと秋の例祭の秋祭りが催されていることがある。昭和55（1980）年に発行され、西谷地区の昭和の中頃の様子について書かれている『旧村誌』によれば、簡素な春祭りに対し、秋祭りは盛大だということが各集落に共通していたようである。それによれば、当時春祭りは、神社境内に幟を立て灯明を奉納したりして神事を行い、各家庭で赤飯を炊くといったことで終わるといった。ただ、栢野だけは、春祭りも秋祭り同様赤飯を炊いたり餅をついたり、親戚等を招いての酒宴を行ったりと、賑やかであったようであ

る（山中町公民館 1980：91）。一方の秋祭りは、『旧村誌』には「各戸餅を撒く赤飯を炊く鯨を作る等のご馳走をなし他村にある親戚を招し、酒肴を饗し重詰等を贈る」（山中町公民館 1980：91）とあり、また踊りをする集落もあるとあり、その盛大さが垣間見える。

このことと合わせて、西谷地区の祭りに顕著なことは、踊りだといえる。西谷地区はもともと踊りが盛んで、昔は「越中おわら節」（西谷の人々は「おはら」と呼ぶ）に乗せたおわら踊りが踊られていたが、現在は「山中節」や「佐渡おけさ」に乗せた踊りや「こいこい音頭」も踊られるという。しかし、現在は春・秋の祭りがどちらも神事のみなど、簡素に終わらせる地域が多くなっている。

神社自体についてしてみると、大きな樹木が森々と生い茂った中にあり、どの神社も住居が立ち並ぶ地帯よりも高い場所に位置していることがわかる。社殿にたどり着くには相当な高さ、段数の石の階段を上らなくてはならないが、やはりこうした立地の点についても神を敬う住民の先祖たちの配慮が生かされているのだろう。

神社に祀られている神々についてみると、上でも述べたように、観音菩薩や阿弥陀如来といった仏が他の神と一緒に祀られている神社が多い。栢野は白山信仰の本尊である妙理観音、我谷は観音菩薩（木造の観音菩薩像が祀られている）、風谷は阿弥陀如来（木造の阿弥陀如来像が祀られている）、枯湊は阿弥陀如来、片谷は阿弥陀如来、坂の下は十一面観音（木造の十一面観音が祀られている）、小杉は十一面観音（木造の十一面観音像が祀られている）生水は十一面観音、真砂は大日如来（木造の大日如来が祀られている）ということである。これらの仏は主要な白山の神々の化身、本地仏であり、西谷地区全体が福井の白山信仰の中心「平泉寺」の勢力下にあったということからも、白山信仰との関わりがうかがい知れるかもしれない。

このように、人々にとって神社は祭りなどを通しては身近な存在でありながら、仏教の神と同等の畏敬すべき存在として扱われてきたということが、西谷地区全体に共通していると言えるだろう。これらを前提として、夏の調査で訪れた菅谷、下谷、栢野、我谷の4集落の各神社について以下で見ていく。

3. 各集落の神社について

3.1 菅谷

1) 神社概要

菅谷は4集落の中でもっとも住民数が多い集落であり、旧菅谷小学校があった土地に建てられた菅谷町会館（その旧体育館の一部を利用して昭和61（1986）年に会館は建てられた）の隣に、八幡神社は鎮座する。そのため、会館も含め八幡神社の位置する一帯は、菅谷の中心的な場所の

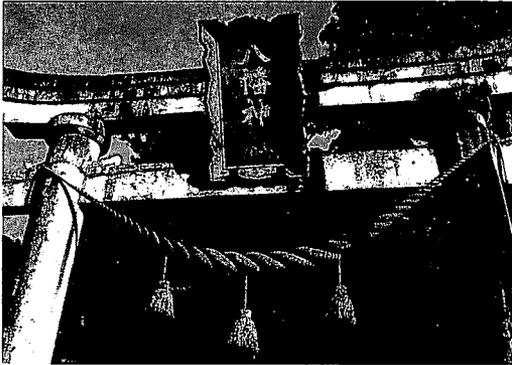


写真1 菅谷八幡神社の鳥居

ようである。

『山中町史 現代編』によれば、この八幡神社は応神天皇を祀り、明治 21 (1888) 年に若宮八幡社から八幡神社に改称し、明治 41 (1907) 年には神饌幣帛料供進社に指定されている。また、その御神体は鏡とされる(山中町史編纂委員会 1995 : 724-725)。

神社境内についてみると、その境内はとても広く鳥居を過ぎ少し歩くと社殿に向かって右側に、昭和 18 (1885) 年 8 月 14 日に

国指定文化財の天然記念物に指定された「三つ又大スギ」が大きな注連縄に巻かれて生えている。その名のとおり幹から上が三つに分かれており、これには「船の帆柱に使おうと大スギを切り出そうとしていたら、次の日三つに割れてしまった」(町内会長 S さん、60 歳代、男性) という言い伝えが残っている。拝殿までの参道の両脇にはいくつもの木々が参道を覆うように生え、その先階段を上ると拝殿へ辿り着く。

建物自体は、神殿・幣殿・拝殿があり、総檜造りで銅瓦葺、正面千鳥破風付というつくりから成る。神社の家紋というべき神紋は、菅谷の八幡神社の場合 2 匹の鳩紋で、扉や屋根の部分など所々に見られる。鳩は軍神とされ、八幡大菩薩の神使だという故事により、全国各地の八幡神社でも神紋として採り入れられている。現在の建物は、昭和 51 (1976) 年に建て替えられたもので、その費用はおよそ 8 千万円かかったそうである。

神社に関わる役員については、集落の氏子を代表する「氏子総代」がいる。菅谷の氏子総代は 3 人いて、この氏子総代も町内会長と同じ仕組みで、1 年ごとに前役→総代長→後役(前役と後役を合わせて「あいやく」と呼ばれる) という順序で担当することになる。氏子総代になりうる人については、現総代長の N さん (80 歳代、男性) によれば、「昔はやりたがる人がいたんだが、今では町内会長経験者の中で順番に回している」ということである。

2) 神社に関わる行事・活動

神社の行事を暦の順に見ていけば、まず元旦の朝、神社に初参りをする行事がある。この行事に特別な名称は無いようだが、朝 8 時から 1 時間ほど、宮司・町内会長・氏子総代の 3 人・青年会の代表・あとは地元住民の自由参加によって、その年の繁栄を祈願する行事である。

続いて、1 月 15 日に神社の境内で「左義長」が行われる。しかし、菅谷の左義長は昔から行われてきたというものではなく、お札等の処理に困るという住民の声により、ここ 10 年ほど前から

始まったものだという。

次に、3月5日に「春祭り」が行われる。西谷地区内の他の集落でも春祭りは行われているのだが、菅谷以外は4月以降に行われる。菅谷で昔から3月という早い時期に行われるのは、「早く雪が溶けるようにと願って」（Sさん）ということである。春祭りに参加するのは、町内会長・氏子総代・青年会の代表で、山中白山神社のYさんに来てもらって神事を行い、その後参加した人たちで酒を飲んで終わる。塩や米、野菜、魚、酒、乾物、果物といったものが供えられるが、こうしたものは各集落で共通している。境内には短い幟が立てられ、提灯も1つ下げられる。Nさんはこの春祭りのことを、もともと「豊作を祈る祈願祭」的性格の祭りだと言っていた。

この春祭りよりも盛大に、そしてより住民全員参加型で行われるのが、「秋祭り」である。もともと、収穫祭といった性格から、新米がとれる9月26日ごろに行われていたのが、昭和51（1976）年の神社建て替えを機に10月1日となり、さらに、子供が集まるようにと9月15日（敬老の日）とし、平成19（2007）年からは9月の第3月曜（敬老の日）の祝日前の日曜日に催されることになった。Nさんによれば、より多くの住民が参加できるようにという工夫だという。境内には、大小の幟が立てられ、提灯も2つ下げられる。春祭り同様、まずYさんに来てもらって神事を行う。神事が終わると、住民による「楽しむ」祭りが始まる。青年会によるビールや焼き鳥の振る舞いや子供神輿や保育所神輿といったこともされる。他の地域では少子化の影響から閉めることになった保育所も増えているということだが、菅谷では依然として保育所神輿が行われている。昔は子供獅子舞もあったということだが、今は行われていない。「よっぽど面白いことでなければなくなってしまふんじゃないかな。教える人もいなくなるし続かない」とNさんは言う。

その後、15時ごろから初老を迎えた人々による餅撒きが行われる。八幡神社で御祓いをした人々が会館前の広場に立てられたやぐらの上から餅を撒く。前後2～3年の中で該当する人がまとまって行うということで、去年は10人ほどの人がおよそ3千個の餅を撒き神社に30万円ほどの灯籠を寄付したが、今年は該当者がいないということで、代わりに町内会が餅をつき撒いたそうである。

秋祭りでは、住民による踊りも行われる。もともと菅谷では毎年8月に「夏の盆踊り」が行われていたが、15年ほど前になくなった。上でも述べたように西谷地区は踊りが盛んで、その中でも菅谷は山中で最も踊りが盛んと言われ、富山県から「越中おわら節」の講師を呼ぶほどである。祭りでは町内会長や婦人会会長らが審査委員というコンテスト形式で行われ、20時に出場者が会館前広場に集合して、班対抗で踊る。班ごとに衣装を揃えたり、仮装して出る班もあるそうである（Sさん）。

こうした春祭り、秋祭りであるが、昔はその準備等の仕切りにおいて、忙しい氏子総代に代わって4～50人ほどいた青年会によって担われていた。しかし、今では人数も少なくなってきてま

た要領もうまく伝わりきっていないということで、各班からも祭りの準備要員を数人出し、手伝うことになっている（Sさん）。

その他に神社に関わる活動としては、神社の清掃がある。「平成 18 年度菅谷町婦人会事業経過報告書」によれば、昨年（2006 年）は 8 月 6 日と 9 月 10 日に婦人会による清掃が行われたようだが、他にも宝寿会¹⁾の人々による清掃活動や氏子総代など、頻繁になされている。追加調査で N さんに話を聞きに行った 2007 年 11 月 20 日も、「今日も風が強いから、これから枯れ葉を掃きに行くようだ」と言っていた。

3.2 下谷

1) 神社概要

下谷は、4 集落の中でも最も山中の街中に近い土地にある。そのためか、街中との関係性の強さは、以下見ていくように神社関連の行事にもみられる。

『山中町史 現代編』によると、下谷の白山神社は他の 4 集落同様創立年代は不詳で、慶応 3（1867）年に社殿を建て替え、明治 21（1888）年にその名称が「白山社」から「白山神社」に変わったことがわかっている。祭神は、菊理媛神で、その木彫の神像の他、表に「奉納関 稻荷大明神」、裏に「備中守 藤原清宣」の銘のある古刀が一振り納められている（山中町史編纂委員会 1995：722-723）。

境内はコンクリート塀で囲われていて、社殿に辿り着くには長い階段を上る。階段を上る途中、右側にタブの大木が生えていて、他の木とともに神社全体を覆っている。この大木も相当な大きさで、平成 10（1998）年に加賀市の市指定文化財として、天然記念物「白山神社タブノキ」と指定された。また左側には以前使われていたブランコがあり、子供たちの遊び場であったと思われる。社殿は総檜造でコバの流れ造、神紋の「輪宝紋」が社殿のあちこちに彫り込まれていた。ちなみに、山中の白山神社でもこの輪宝紋が採られている。

境内の敷地の横には、下谷町会館兼「蓮如堂」という建物がある。これは、文明 5（1473）年に蓮如上人が山中温泉湯治の際に下谷で休憩し、筵の上で「南無阿弥陀仏」の六字の名号を書き残したことに感激した当時の村人たちが建てたものだという。この名号は、筵の上で書かれたためにその文字が虎の縞のように見えるため今日では「虎斑の名号」と呼ばれ、毎年 4 月 25 日の蓮如忌に開扉されている。建物自体は、昭和 55（1980）年に改築されている。

下谷の氏子総代は、毎年前半の代表者が集って行く総会の前の班会において話し合いで一人、計 5 人が 3 年間担当することになっている。氏子総代の一番の仕事は、春秋の祭りの前に各家庭をまわって募る寄付金の収集である。こうして集めた寄付金は、社殿が天災等により修復が必要になったときに足しになるようにと積み立ててある。

2) 神社に関わる行事・活動

下谷の神社関連の行事は、1月1日の参拝「元朝式」から始まる。他の集落でも正月の参拝は行われるもの、「元朝式」と名前を以って行われているのは下谷だけである。参加するのは町内会長と氏子総代の他、毎年10人ほどの人が集まるという。菅谷や栢野と違って山中白山神社のYさんは呼ばずに、正月飾りをして餅とお神酒を供えるというような簡素な形式で行われる。参拝の後、酒を交えて軽く新年会がなされる。

左義長は、集落を主体としては行われぬ。だが、山中の白山神社や医王寺の左義長に参加する人が多いようで、山中の街中に住む人々も、主にこの二つのどちらかの左義長に参加しているそうである。

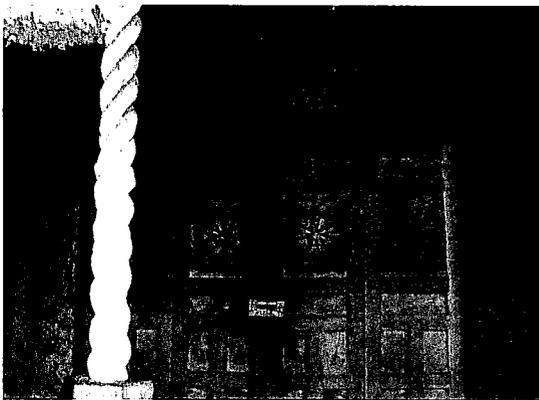


写真2 下谷白山神社の輪宝紋



写真3 蓮如堂

会長Nさん、50歳代、男性)。

直接神社とは関係はないのだが、下谷では夏祭りとして集落の人々によるレクリエーションが昔から行われてきた。Nさんによれば、以前は海水浴によく行っていたが、海難事故の恐れなど

下谷の春祭りはこれまで日にちが何度か変わっていて、現在は4月10日に行われる。昔は25歳までの若者の手によって準備等がなされていたが、今では各班(全5班)から一家庭一人ずつ、三年間準備に当たることになっている。当日の朝6時から準備が始まり、神紋の入った大きな剣旗や提灯を立てる。これらは秋祭りも同様で、戦後数年後までは「天下泰平」と書かれた大きな幟も立てたという(Oさん、80歳代、男性)。9時からYさん呼んで祭りが始まり、その後会館で酒を飲んだりし、次の日片付けがなされる。秋祭りでもそうだが、有志者や商売をしている人はお神酒を持ち寄り供える。昔は職人が多く、正月の3日間・盆の三日間・祭りの2日間は数少ない休みであり、踊りなどもやって賑やかだったが、現在では祭りの案内は全家庭に出すもの実際に参加するのは氏子総代と町内会長ぐらいいだという(Oさん)(町内

の理由から、今では集落内の空き地で何らかのイベントをしたり、平成18(2007)年にはかんぼの宿に宿泊しに行ったということである。この夏祭りは、参加費の他町内会費によって催されている。

秋祭りは9月22日、彼岸の中日の行われ、これは山中の「こいこい祭り」の日程に合わせて決まったものである。「仕事に出ている人が祭りのたびに休むのは大変」といった理由で、日程を変えればどちらの祭りにも参加できるということである。下谷に新しく越してきた住民らも参加して春祭りよりは盛大に行われるものの、やぐらを立てて踊りを踊ったり(20年ほど前)、親戚を呼んで家でご馳走を作ったりしていた頃に比べれば、その盛大さは衰退していつているようである。Nさんは、「子供の頃は的屋²⁾も来てた。もともとは収穫祭みたいなものだったのだろうけど、今下谷で本業として田畑をやっている人はいないから、そうした性格は薄らいでるだろう」と言っていた。また、「昔は休みが少なかったから、盛大に祭りをやったが、だんだん静かになってきている」(Sさん、70歳代、男性)、「食べ物とか休みの日、今はいろんなものがあふれてて祭りが楽しみじゃなくなってきている」(Oさん)という声もある。

踊りは下谷でも盛んで、集落内の祭りで踊ることはしないが、こいこい祭りでは下谷や菅谷が1つのチームとして出場するほか、下谷・菅谷・栢野・我谷合同の「西谷地区連合」というチームでも出場する。

初老のお祝いについては、集落で行うのではなく、下谷の人々は西谷地区で唯一山中の小学校に通い卒業するため、山中の街中に住む人々と一緒に山中の白山神社で行う。神事や記念撮影、お祝いの餅を配ったりする。初老のお祝いのために25歳過ぎから「講」として同年代の人々で積立を始めるといふことだが、これは強制ではなく参加しない人もいる。そうして積み立てたお金で神社に灯籠などを寄付したり、旅行や「伊勢詣り」をしたりするということである。山中において、この初老の伊勢詣りというのは一般的なことだといふ(Yさん)。しかし、人の数も少なくなってきて、こうした寄付も個人によるお神酒といったものが増えてきている。

神社の清掃は、毎年春秋の祭りの前に、公園や道路の側溝の清掃などと合わせ、「町内人夫」として行われる。平成18(2007)年は、4月15日と8月8日に行われた。この町内人夫には各家庭から1人は参加することになっているが、出ることができないときは出不足金として3千円支払うことになっている。清掃終了後、以前は会館で酒を飲んだりもしたが、現在は茶菓子やビールなどを配って終わるといふ。

3.3 栢野

1) 神社概要

栢野の菅原神社の創立年代は不明であるが、わかっている範囲でもその歴史は深い。

平安時代から明治時代はじめにかけて栢野寺、栢野社と名前を変え、その明治以前には「八幡神」を祀っていたようである。栢野の歴史、言い伝えに詳しいTさん（70歳代、男性）によれば、「八幡台菩薩」と書かれた幟が残されていたということで、そのためか、そこは庶民だけでなく武士にも尊敬を受け、特に源氏・平氏・朝倉・富樫の武将からも参拝したという。その後の歴史については、『山中町史 現代編』によると、明治20（1887）年に「栢野社」から、菅原道真を合祀して「菅原神社」に改称し、明治41（1908）年神饌幣帛料供進社に指定されたとある（山中町史編纂委員会 1995：730）。ご神体は九谷焼の壺・鏡・一寸三分の大きさの観音像とされ、この観音像には、源平合戦で栢野に逃げのびてきた「平の馬之助」という人物に由緒のあるものだという。

また、明治5（1872）年の政府による「廃仏毀釈」の達しにより、古文書等神仏習合の痕跡は焼かれて残されていないが、「妙理観世音菩薩」（白山信仰の主祭神の「菊理媛神」の化身とされる）と書かれた幟が残されている。栢野の人々は、当時この幟や先に述べた観音像を隠して残そうとしたということである。

道路から階段で少し上がった広い神社境内の奥に、拝殿・幣殿・神殿が建っている。現在のものは昭和19（1944）年に改築されたもので、拝殿は総檜材瓦葺で日吉造、神殿は銅板葺流れ造りとなっていて、合わせるととても大きい。神紋は「梅紋」で、菅原道真を祀る神社ではこの神紋のところが多いようで、この神社でも瓦などに刻まれている。境内の社殿手前には、「盤持石（ばんもちいし）」という60センチメートル四方ほどの石が12個置いてある。そこにある石碑を見ると、



写真4 盤持石

昔若者たちがこの盤持石を持ち上げ、それによって一人前と認められることができたというものである。昭和初期まで行われていた風習だという。

忘れてはならないのが、境内に入っすぐのところにある大きな4本の杉の木である。このうち一番手前の右側に立つ一本は、昭和3（1928）年11月30日に「栢野の大スギ」として国指定文化財の天然記念物に指定された。昭和22（1947）年10月27日天皇陛下北陸ご巡幸の際に

立ち寄られたことから「天覧の大杉」とも呼ばれる。他の3本も平成17（2005）年8月16日に「菅原神社の大スギ」として県指定天然記念物に指定されている。「栢野の大スギ」は樹高36メートル、目通り幹囲7.6メートルで、他の3本もこれに負けない大きさで、境内を出て道路からは、こ

れらの大スギが神社全体を覆っているように見える。境内には、こうした大スギの根を傷めずに多くの人が近くで見学できるよう、境内入り口から社殿まで檜造りの浮橋参道が設置されている。筆者が調査に訪れた日も、大型バスに乗ってやってきた山中温泉への大勢の観光客が見学に来ていた。

氏子総代は全員で3人いて、選び方は町内会長による選任である。役割としては、元旦や春秋の祭り等の行事の他、神社の賽銭管理といったことを行う。菅谷のように補助的な役割の「あいやく」は設けず、下谷同様担当者の3人全員が氏子総代の1人としてそうした仕事をする。

2) 神社に関わる行事・活動

栢野での神社に関わる年初めの行事としては、町内会長や氏子総代ら役員が集ってする初参りがある。栢野ではもともと、下谷や我谷のように1月1日元旦は、町内会長や氏子総代らが単独で神社にお参りしていたのだが、ここ数年ほど前から、菅谷同様に朝7時に山中白山神社のYさんと呼び正月の参拝を行っている。また、大晦日のうちから皆が参拝できるように正月飾り等の準備をして開放してある。



写真5 栢野の大スギ

次に行われるのが、小正月の左義長である。以前は2月14日に行われていて、平成20(2008)年は1月12日に行われた。その左義長であるが、昔から行われてきたのは4集落の中で栢野のみである。場所は忠霊塔の立つ神社横の広場で、当日の朝から準備が始まり、午後1時ごろから燃やし始める。以前は、青年会の仕切りで準備から片づけまでしていたが今は実質町内会の仕切りとなり、また夕方になってから燃やしていたのだが、防火の理由で昼間に行

われることになった。燃やすにあたっては、竹を組んだものの中にわらを俵状にしたものを詰め、神仏のお札等の他、男の子は書初め、女の子は「キリコ」と呼ばれる色紙や布で作った10センチメートルほどの玉を燃やし、健康や子供たちの勉強向上を願う。昔は、子供たちが燃やす前にこの組んだ竹を、「左義長燃やすんじやよいしょ」と言いながら集落中を担ぎ、燃やすものを集めて回っていたが、子供の数が少なくなってきて担ぐことはしなくなった。それから、燃やす書初めやキリコは、左義長の日の二週間ほど前から神社前に吊るしていたものだったが、現在は1日前にだけ吊るしておくようになっている。終わった後に燃え残った竹だが、これを持ち帰り翌朝再

度燃やして作る小豆粥を食べると、その一年が無病息災でいられるという言い伝えも残っている。

次に訪れるのが春秋の祭りであるが、栢野では春と秋どちらの祭りも18日に行われる。この「18」という数字は、観音菩薩の命日とされ、観音菩薩に由縁を持つこの菅原神社ではこの日に行くと決めているという。そのため、18日が平日と重なることもあるのだが、町内会長のKさんをはじめとする住民の方々が「この18日という日は意地でも変えない」というように、この日にはかなりのこだわりがあるようで、今なお18日に行われている。

4月18日に行われる春祭りは、今では町内会長と氏子総代が参加し、Yさんと呼んでお参りをするという簡素な形態をとっている。しかし、先にも述べたように昭和の中頃の様子を記した『旧村誌』によれば、家ごとに赤飯を炊いたり餅をついたりし、村の名士や親戚を招いて宴会をしたり、夜間は境内に火を灯して若者たちが太鼓を打ったりして楽しんでいたり、もっと賑やかであったことがわかる（山中町公民館 1980：91）。準備については、今では青年会から町内会長の指揮へと変わり、祭りの一週間ほど前の休日の朝から清掃や大木の注連縄の交換、当日には、普段は神社横の保管場所にしまっている15メートルほどの大きな幟を立てる。これらのことは、春と秋で共通している。それから、春祭りの日には各家庭でもぎの草団子を作って食べる習慣がある。先にも述べた「平の馬之助」という武士が観音様のお告げで草団子を食べたところ、すぐに傷が癒えたという言い伝えが栢野にはあり、草団子と栢野との関係の由縁は古いものである。各家庭で作られた草団子は親戚や近所に配ったりして、「家ごとに違う味を食べ比べることもまた、楽しみだ」（町内会長Kさん、60歳代、男性）という。

昭和40年代半ばまでは、ここ栢野でも夏の盆踊りがあったが、今は行われていない。そこでは、越中おわら節や山中節、佐渡おけさの踊りが踊られていた。

続いて秋祭りの方は9月18日で、春に比べて大規模に行われる。かつては前祭・本祭・後祭と3日かけて行われていたが、より人数が集まりやすくなるように十数年ほど前から18日の本祭のみとなった。神事が終わった後、以前は大人だけで宴会をすることが秋祭りの主であったが、現在は子供も含めた全員参加型のものとなっている。それは、平成18（2006）年から「秋は皆で集まって何かやろう」ということで、町内会で予算を設けて栢野の町内会館でバーベキューやビンゴをすることから始まった。初年の参加者数は、百数十人にもものぼったという。日にちについては、「祈願等は必ず18日に行い、娯楽行事は人が集まりやすいように土曜日か日曜日にした。昨年（平成18年）はたまたま18日が敬老の日で祝日に当たったから18日にやったけど、今年（平成19年）は15日の土曜日にやった」ということだった。娯楽の内容や実施日など、より人が集まるようにという工夫である。Tさん（70歳代、女性）は、「そもそも全員参加できるのが祭りというものだろう」と祭りのことをとても嬉しそうに語ってくれた。また、そんな全員参加型の楽しさを皆で分け合えるような取り組みに対し、Kさんの「今と昔の祭りを比べても、そう変わら

んのとちやう。祭りっていうものはその日だけはおおっぴらに馬鹿騒ぎできる日。今だってそう」という話にも栢野の人々の祭りに対する思いがうかがえる。

神社の清掃活動は、Kさんが「神社だし、まして大杉があつて人が大勢訪れるとこだからきれいにしとかんな」というように、先にも述べた祭りの前の清掃・準備などを含め不定期でことあるごとに行われる。こうした活動は、「人夫」（栢野他、西谷地区全体で「ニンブ」と呼ばれる）と呼ばれ、本来は全家庭から1人は参加することになっているが、どうしても出られない場合のみ出不足金を払うことでその代わりとする。2007年11月18日に筆者が再調査で訪れた際には、雪が降る前の清掃や雪への準備が行われていた。冬は、雪で大木が傷まないように周りにムシロのようなものを張り巡らせ、以前は社殿の建物の方にも同様の対策をしていたということである。活動後、参加者には飲み物等が配られていた。

3.4 我谷

1) 神社概要

我谷の八幡神社は、明治5（1872）年に「八幡社」から「八幡神社」へと改称し、それに伴い社殿も改築された。祭神は応神天皇で、ご神体として木造の観音像が祀られている（山中町史編纂委員会 1995：732）。

神社の位置は、現在我谷の人々が多く暮らす土地から数キロほど福井方面へ向かう道路の左側にあり、これはダム建設によって昭和39（1964）年に移転されたことによる。我谷の町内会長であるNさん（70歳代、男性）によれば、それ以前にも我谷の八幡神社は数回移転しているそうである。

神社の周囲は木々が茂っていて、その奥は山へと続いていく。他の集落も神社の周囲が森のようになってはいるが、実際に山の麓にあるというのは我谷の八幡神社だけである。境内にはたくさん灯籠が立っていて、社殿は石垣で囲われている。昭和61（1986）年に建てられたクリーム色の社殿はコンクリート製の瓦葺で、2枚の褐色の扉の中央には、菅谷の八幡神社と同じ神紋である鳩2匹が、金色に彩られて付けられている。拝殿の奥にある神殿は、上述の明治の建て替えて建てられた旧社殿を移転させたものを神殿としている。「状態もよくつくりも立派ですばらしい」ということが、その理由であった（Nさん）。この旧社殿は加賀の名宮大工、天日仁太郎氏による仕事で、我谷に住むHさん（70歳代、男性）の父親はその天日氏の一番弟子として共に仕事をしていたという。



写真6 我谷八幡神社の社殿

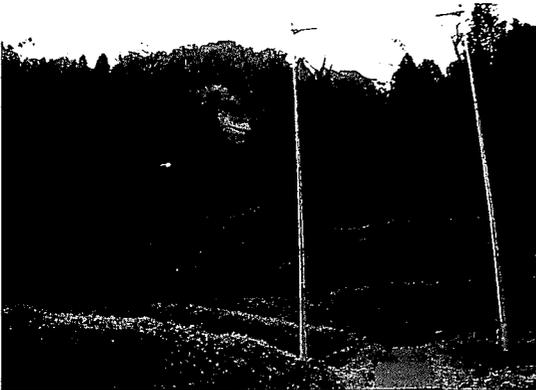


写真7 我谷八幡神社の外観

その他境内に至る途中には、道路から神社側に少し入ったところに幟を立てるための金属製ポールが2本、通路の両側に立てられている。また、鳥居をくぐって社殿へ向かう階段には金属製の手すりが設置されている。

2) 神社に関わる行事・活動

我谷では、住民の数が少なくなってきたこととも関係して、現在の神社に関わる行事は他の集落と比べて簡素な形態をとっている。

まず、元旦に当たって、集落の人々が参拝できるように初詣の準備が大晦日の朝 8 時半から行われる。そして、元旦の朝、町内会長や氏子総代らが神社に参拝することとなっている。この際、下谷と同様に山中白山神社のYさんは呼ばずに行われる。

Nさんによると、我谷では左義長は昔から行っていない、ということだった。

次に祭りについて、春祭りは4月15日、秋祭りは10月2日に行われ、この日にち

は『旧村誌』に書かれているのと同じであり、昭和の中頃より変わらないものと思われる（山中町公民館 1980：92）。

現在我谷の祭りは、春秋ともに神事のみという形態をとっている。以前は、祭りに際して大小の幟を立てていたが、今では住民数が少なく大変なため、小さい方のみを立て、それも簡単にできるようにと神社前に金属製ポールを立てるに至った（Nさん）。その他、祭りでは屋根付提灯を5つ立てる。参加者は、元旦の参拝についても言えることだが、以前は住民も多く参加し参拝していたものの、現在は氏子総代や町内会長といった役員の方々が参加するぐらいだという。

春祭りは、神職のYさん呼び、基本的には町内会長や氏子総代が参加して行われる。当日の朝5時半から準備を始め、次の日の夕方の5時半から後片付けを始める。この後に、少しお酒を飲んでから帰るといふ。

表 2 4 集落の神社ごとの年間行事日程 (平成 19 年度)

	菅谷	下谷	栢野	我谷
4月		15日神社清掃	18日春祭り	15日春祭り
5月		8日春祭り		
6月				
7月				29日神社清掃
8月	6日神社清掃	8日神社清掃		
9月	10日神社清掃 15日秋祭り	22日秋祭り	18日秋祭り	
10月				2日秋祭り
11月				
12月				
1月	1日元旦の参拝	1日元朝式	1日元旦の参拝 13日左義長	1日元旦の参拝
2月				
3月	5日春祭り (18年度)			

(聞き取りから筆者が作成)

秋祭りも、昔は太鼓をたたいて越中おはらや山中節を踊ったり酒を飲んだりして盛大に行っていたものの、現在は神事のみである。Nさんは、「派手なことをやらなくなったのは15年ほど前ぐらいからかな」と言っていた。春祭りと同じく、当日の朝5時半から準備を始め、次の日の夕方5時半から後片付けを始め、その後お酒を飲んで帰る。

初老のお祝いは、当人たちが共同して神社に灯籠などを寄付するという事で、境内にはたくさんさんの灯籠が立っていた。初老の人と古希の人が、一緒になって寄付したりもする。Nさんは、「神社に自分の名前が無いとちょっと」と言っていた。

氏子総代は、「あいやく」と合わせて3人という、菅谷と同様の形をとる。ただ、我谷では総代長というべき役職は町内会長が兼任している。そのため、神社の管理や祭りの準備、片付けでの指揮は町内会長が執っている。Nさんによると、この氏子総代の役職にはもともと町内会長経験者の古参の方々が就いていたということである。

神社の清掃活動は全家庭から出してもらうことになっていて、神社境内の他、集落から少し福井方面へ進んだところにある共同墓地なども清掃の対象としている。我谷の平成19(2007)年度年間行事計画によれば、当年は7月29日の日曜日午前8時から行われている。住民の方々は、「あれこれと指示をしなくてもやるべきことがわかってる」(Nさん)というように、自身の役割を把握している分、スムーズに進むという。

4. 考察

以上までで記述してきたことから、現代における西谷地区の各集落における神社と住民との関わりあいについて見えてくるのが二つある。

一つ目は、初めにも述べたように仏教盛んな西谷地区であっても、春秋の祭りを今なお手厚く行うなどして、神社に対しても敬意が払われている点である。そもそも、明治初年の神仏分離の政策までは、仏教と神道には厳密な区別はなかった。さらに、西谷地区にはそうした政策が強く影響することは無かった（むしろ、そうした政策から神々を守ったと言えるのかもしれない）ということがいくつかの神社にご神体として観音菩薩や阿弥陀如来が残り祀られていることからわかる。仏教（真宗）が優位などという考え方はなく、共に神聖なものとして捉えられてきたといえるだろう。だがそうは言っても、現代の人々の眼からすれば、両者の区別は当然あるはずである。

それについて、私は仏教と神社それぞれへの敬意の形態が、「個」つまり個人や家庭と、「共同」つまり集落とに分かれていると筆者は考える。

『旧村誌』によれば、昭和中頃の各集落の家庭がどの檀那寺（西谷地区では「おてつぎ」と呼ばれている）に属しているかは、下谷を除き、同じ集落内ではあってもばらばらである（山中町公民館 1980：94-95）。また、「講」など寺の行事についても、菅谷の徳性寺の「講」などの行事を除いては、集落の人が集まって仏教の行事をするというようなことは無い。とすれば仏教への敬意とは、あくまで、集落に関わらない1人や1家庭といった単位での敬意といえるのではないか。

一方、神社はその集落内の住民すべてが関わってくる。祭りに参加するのは住民であり、清掃活動にも全家庭が参加しなければならない。これは、新しく集落に引っ越してきた人もその対象となる。祭りが簡素化してきても、氏子総代は全集落民を氏子ととらえ、その代表として神社に参拝する。こうした意味で、神社への敬意の形態は、「共同」、もしくは「共同」を意識したものといえるのではないだろうか。

次に二つ目は、神社のもつ性格についてである。具体的に言えば、祭りの娯楽性である。これまで述べてきたように、「祭りは楽しむもの」という話はどの集落の方々からも聞かせてもらった。世代を問わずに楽しんでもらえるよう、努力して案を出す集落もある。楽しむための祭りといった意識は、住民すべてに浸透しているようである。だが一方で、人口の減少、特に若い世代が減ってきたことにより、祭りが簡素化してきたり祭りの中の一部分が廃止になったりしてきていることも、見てきたとおり事実である。

ただ、そうした問題に対しても、祭りを続けていこうという姿勢はどの集落にも見られる。我

谷では、住民の数が少なくなっても幟を揚げるができるようにとポールを立てたり、菅谷では人数の減少する青年会だけでは準備が大変ということで各班から準備に携わってもらう。何らかの工夫を重ねて、楽しい祭りを存続させようとしているのである。

さらに、山中白山神社のYさんに聞いた話では、ダム建設によって集団離村した集落の元住民たちが毎年春秋の祭りの時に集まり、参拝の他皆でそばを食べたりバーベキューをして楽しんでいるという。

これらから、神社の祭りというものには特別な意味があり、そしてその鍵は祭りの娯楽性だといえるかもしれない。

これら二つの点を合わせて考えれば、現代の西谷地区の集落の人々にとっての神社の役割とは、住民どうしが顔を合わせるきっかけであると考えられる。「共同」で神社に畏敬の念を表し、世代を問わず皆で祭りを楽しむ。人が少なくなってきたとしても、同じ集落に住む一員として他の住民と交流を維持することができるのである。そしてそれは、日常的な同世代どうしの関わりにとどまらない、異なる世代をも含んだコミュニケーションの場となりうるものだといえるだろう。

注

- 1) 旧山中町全体での高齢者の方々のグループ。レクリエーション活動など様々な活動を行う。
- 2) 祭礼や縁日の境内や参道において、屋台を出して食品や玩具を売る小売商。